

琉球大学学術リポジトリ

[短報] 久米島のウリミバエについて

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015291

—短報—

久米島のウリミバエについて

東 清 二

沖縄本島西海上105kmにある久米島(面積55.1km²で、1970年5月から6月にかけて *Dacus cucurbitae* Coquillett ウリミバエの発生が確認されたことは、琉球植物防疫所の“沖縄群島ウリミバエ発生調査報告書”で知られているが、同年11月同島において調査する機会を得、若干の知見を得たので報告しておく。

まず侵入の経路、時期についてであるが、現在港に近い具志川村の兼城、大田部落周辺と、スイカ栽培の盛んな大原、北原部落に個体数多く、仲里村では CueIure トラップで僅かしか採集されておらず、野生の寄主植物が各地に豊富に自生しているにもかかわらず発生量がそのように片寄っているということは侵入の時期がまだ残りということが考えられる。現地における間取り調査では1964年飛行場建設工事の際に宮古からの労務者が多く、彼らはサバニを利用して宮古と往来し、ついでにスイカを何回となく持参したとのことである。またスイカを栽培している大原、北原部落の農家で3~4年前からスイカに“ウジ”の寄生していることを経験しているとのことである。それは上記の飛行場建設工事から若干遅れた時期であり、まずウリミバエは宮古から港の周辺に侵入し、そこからスイカ栽培の盛んな大原、北原周辺へ伝播し、個体数が多くなったと考えると時期的に一致する。あるいは同地区は飛行場の周辺であり、直接飛行場工事労務者によってスイカとともに本虫が持ち込まれたのかも知れない。なお大原で個体数が多くなったのは寄生植

物のうち冬を過ぎてまず最初に着果するのはスイカ(3~4月)であり、スイカ地帯では年中寄主植物に恵まれることから発生伝播に好都合だといえるからである。なお筆者は1965年5月に仲里村儀間部落内で2個の CueIur トラップを用い3日間調査を行なったが誘殺されなかった。当時はまだ儀間部落周辺まで侵入していなかったかも知れない。

つぎに寄主植物は、栽培種ではカボチャ、キウリ、トウモロコシ、ヘチマ、ニガウリで寄生が確認され、野生種では *Bryonopsis laciniosa* オキナワスズメウリ、*Trichosanthes rostrata* ケカラスウリ、*T. bracteata* オオカラスウリ、*Melothria linkiuensis* クロミノ オキナワ スズメウリの4種に寄生を確認した。オキナワスズメウリは各地に極めて多く自生し、着果時期は5~10月のようで、現在時期遅れのもののみみられた。ケカラスウリも各地に多数自生しており着果時期は10~11月のようである。オオカラスウリは各地に自生するが前2者に比し数は少なく、9~11月に着果するようである。クロミノオキナワスズメウリは4日間で7株のみ見つかった。寄生果率はケカラスウリにおいてもっとも多く3%(672果中)であり、オキナワスズメウリは1%弱(463果中)、オオカラスウリは0.5%(219果中)、クロミノオキナワスズメウリは122果中1果に2頭の寄生であった。そのように寄生率は高いといえないが、寄主植物が各地に豊富にあり、筆者の経験では沖縄列島中野生寄主の最も多いところと考えられるところであり、防除についてはそれなりに十分考慮する必要があると考える。

(琉球農業試験場病理昆虫研究室)